

# オゾン層観測速報

平成 19 年 3 月 20 日 (1/5)

気象庁オゾン層情報センター

## オゾン全量 (2007年2月)

### [概況]

2007年2月の国内3地点における月平均オゾン全量<sup>1)</sup>は、参照値<sup>2)</sup>と比較すると、那覇で多く、札幌、つくばで並であった。那覇では、2月の平均値としては観測開始以来最も大きい値を記録した。(那覇のこれまでの最大値は1986年の274 m atm-cm)。

### [観測結果]

	札幌	つくば	那覇	昭和基地
オゾン全量 (m atm-cm)	398	337	275	295
参照値 <sup>2)</sup> からの偏差 (m atm-cm)	-17	-1	+22	-19
偏差の参照値に対する比 (%)	-4.3	-0.3	+8.0	-6.4

(m atm-cm)



●は2007年の月平均値、○は2006年の月平均値を示す。実線は参照値<sup>2)</sup>、縦実線は標準偏差を示す。昭和基地の点線はオゾンホールが明瞭に現れるようになってから(1981~2000年)の月別平均値を示す。

- 注 1) オゾン全量：ある地点の上空に存在するオゾンの総量を表す。大気の上端から下端までの全層に存在するオゾン全てを仮に地表付近に集め、これを0℃、1気圧にしたときの厚さをいう。cm単位での数値を1000倍してm atm-cm(ミリメートル)という単位で表す。ドブゾンユニット(DU)ともいう。
- 2) 参照値：1971~2000年の月別平均値で、平均的なオゾンの状況を示す。ただし、那覇では1974(観測開始)~2000年、昭和基地ではオゾンホールが明瞭に現れる以前の1961~1980年の月別平均値。参照値との差が標準偏差以内にあるときは「並」、それより大きいときを「多い」、それより小さいときを「少ない」とする。

# オゾン層観測速報

平成 19 年 3 月 20 日 (2/5)

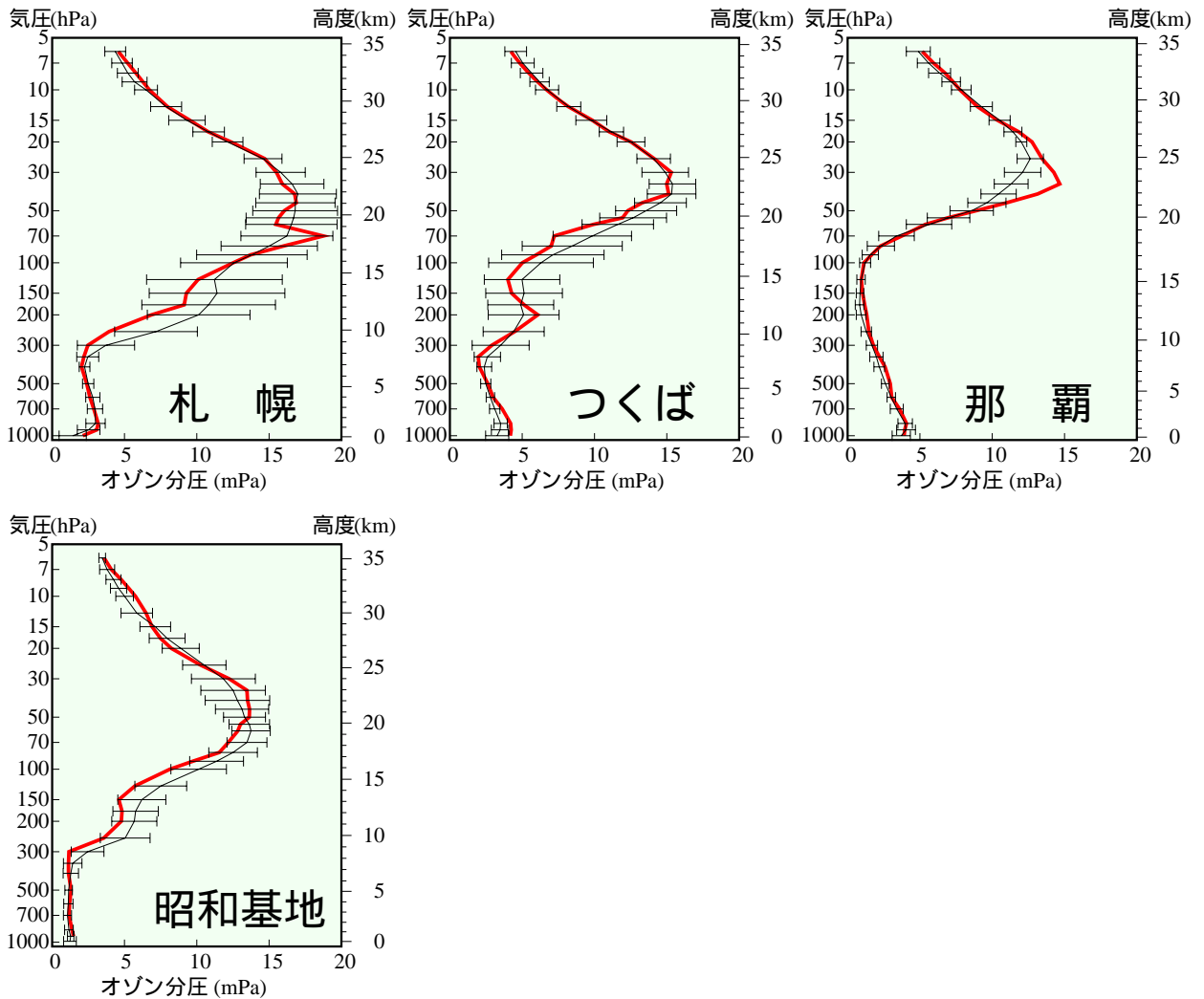
気象庁オゾン層情報センター

## オゾンの高度分布 (2007年2月)

### [概況]

2007年2月の国内3地点及び昭和基地におけるオゾンゾンデ観測によると、各高度のオゾン分圧<sup>1)</sup>は、参照値<sup>2)</sup>と比較すると、つくばの地上～高度3km、那覇の高度6～7km、12～13km、21～24km、昭和基地の高度32～33kmで高く、昭和基地の高度13～16kmで低かった。

### [観測結果]



(国内3地点及び南極昭和基地におけるオゾン分圧の高度分布)

太実線は2007年2月の月平均値、細実線は2月の参照値<sup>2)</sup>、横細実線は標準偏差を示す。

- 注 1) オゾン分圧：ある高さでの大気圧力(気圧)は、各種気体成分の圧力(分圧)の総和であり、オゾンが占める圧力をオゾン分圧という。「オゾン分圧が高い」とは、その高さにおけるオゾンの量が多いということである。
- 2) 参 照 値：1971～2000年の月別平均値で、平均的なオゾンの状況を示す。ただし、那覇では1989(観測開始)～2000年の月別平均値。参照値との差が標準偏差以内にあるときは「並」、それより大きいときを「高い」、それより小さいときを「低い」とする。

# オゾン層観測速報

平成 19 年 3 月 20 日 (3/5)

気象庁オゾン層情報センター

## 日積算紅斑紫外線量 (2007年2月)

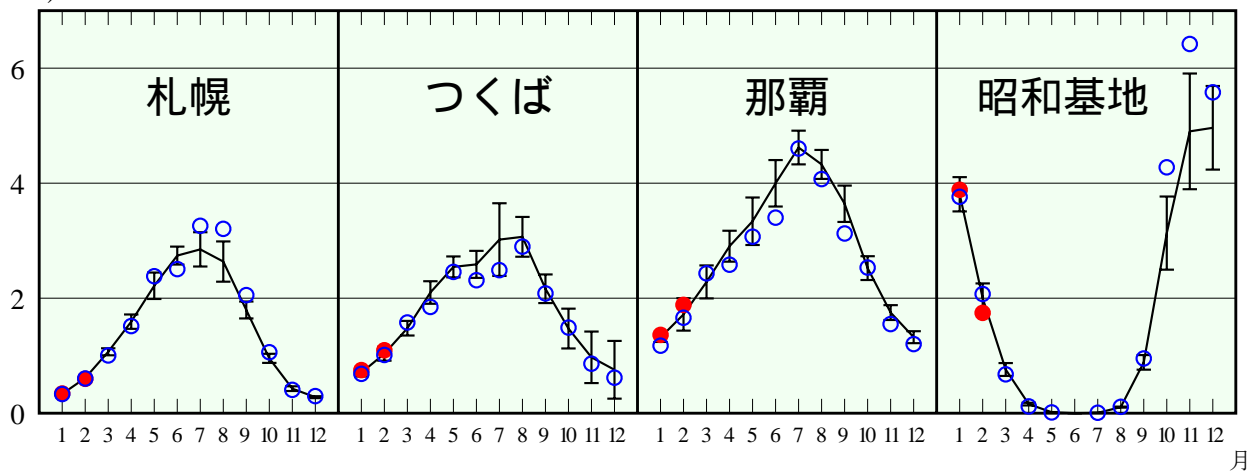
### [概況]

2007年2月の国内3地点における日積算紅斑紫外線量<sup>1)</sup>の月平均値は、参照値<sup>2)</sup>と比較すると、全ての地点で並であった。

### [観測結果]

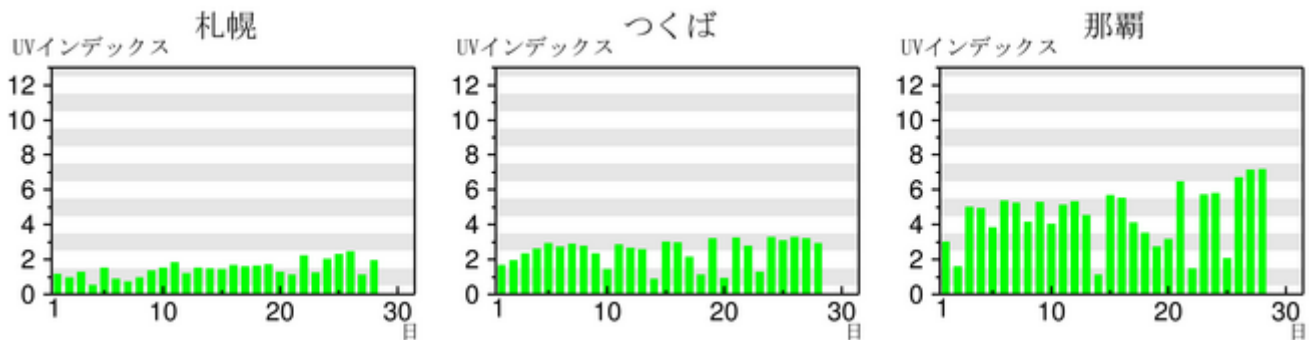
	札幌	つくば	那覇	昭和基地
日積算紅斑紫外線量 (kJ/m <sup>2</sup> )	0.60	1.10	1.89	1.75
参照値 <sup>2)</sup> からの偏差 (kJ/m <sup>2</sup> )	-0.02	+0.06	+0.17	-0.26
[参考]日積算UV-B量 <sup>3)</sup> (kJ/m <sup>2</sup> )	4.03	8.24	14.37	13.08

(kJ/m<sup>2</sup>)



(国内3地点及び南極昭和基地における日積算紅斑紫外線量)

● は2007年の月平均値、○は2006年の月平均値を示す。実線は参照値<sup>2)</sup>、縦実線は標準偏差を示す。



(参考：日最大UVインデックスの推移)

- 注 1) 紅斑 (こうはん) 紫外線量：紫外線が人体へ及ぼす影響の度合を示す量。紅斑とは紫外線を浴びた後皮膚が赤くなることをいう。紫外線が人体に及ぼす影響は波長によって異なるため、280~400nm(ナノメートル)の波長範囲について、波長別紫外線強度に人体への相対的影響度を波長ごとに掛け、積算して求める。紅斑紫外線量を25mW/m<sup>2</sup>で割った値がUVインデックスである。
- 2) 参 照 値：観測開始~2006年の月別累年平均値で、平均的な紅斑紫外線量の状況を示す。観測開始は、札幌、那覇で1991年、つくばで1990年、昭和基地で1993年。紅斑紫外線量の参照値との差が標準偏差以内にあるときを「並」、それより大きいときを「多い」、それより小さいときを「少ない」とする。
- 3) UV-B量：波長が280~315nm(ナノメートル)の紫外線強度の積算値。
- 4) 日積算紅斑紫外線量と日積算UV-B量を算出するにあたり、札幌とつくば、那覇については観測機器の調整等で観測を行っていない時間のデータとしてオゾン全量や気象データ等から推定したデータを用いている。
- 5) 日最大UVインデックスの推移図では、観測機器の調整等で日最大UVインデックスを算出できない場合には白抜きで示す。

# オゾン層観測速報

平成 19 年 3 月 20 日 (4/5)

気象庁オゾン層情報センター

## UVインデックス (2007年2月)

### [概況]

2007年2月の日最大UVインデックス<sup>1)</sup>の月平均値(解析値)は、紫外線が中程度であることを示す3~5の領域が小笠原諸島及び中部地方以西で見られた(図1)。山陰の一部で参照値<sup>2)</sup>に対して10%を超える正偏差の領域が見られた。また、北海道、小笠原諸島および関東、東海、四国の太平洋側に、10%を超える負偏差の領域が見られた(図2)。

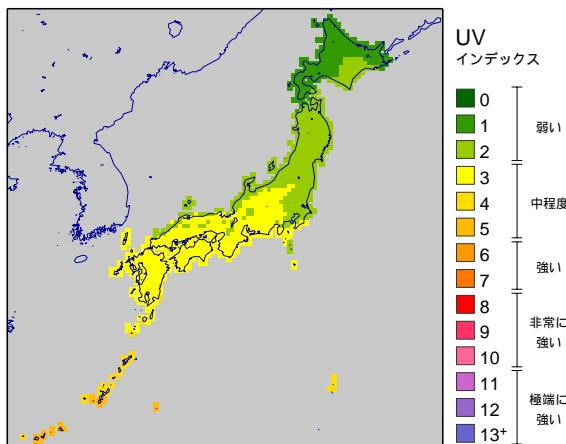


図1: 2月の日最大UVインデックスの月平均分布(解析値)

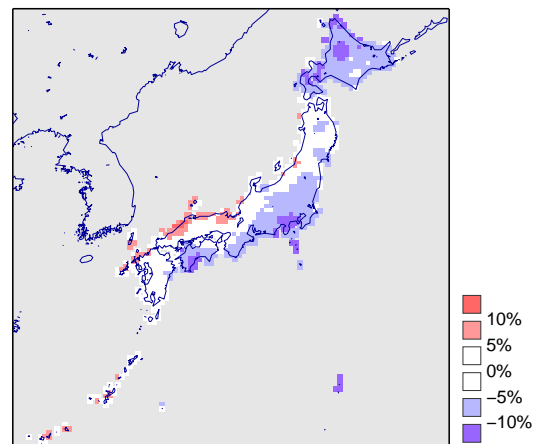


図2: 2月の日最大UVインデックスの参照値からの偏差(解析値)

注 1) UVインデックス: UVインデックスは、紅斑紫外線量(前ページ参照)を日常使いやすい数値にしたもので、紫外線対策を目的として国際的に広く用いられている。UVインデックスの解析値は、毎時のUVインデックスを上空のオゾン量のデータや、気象台やアメダスで観測された気象データ等を基に推定した値である。なお、UVインデックスの予測・観測・解析情報は、気象庁ホームページ(<http://www.jma.go.jp/>)で発表しており、UVインデックスに応じた紫外線対策や求め方などの詳しい解説も掲載している。

2) 参照値: 1997~2006年の月別累年平均値で、平均的な日最大UVインデックスの状況を示す。

# オゾン層観測速報

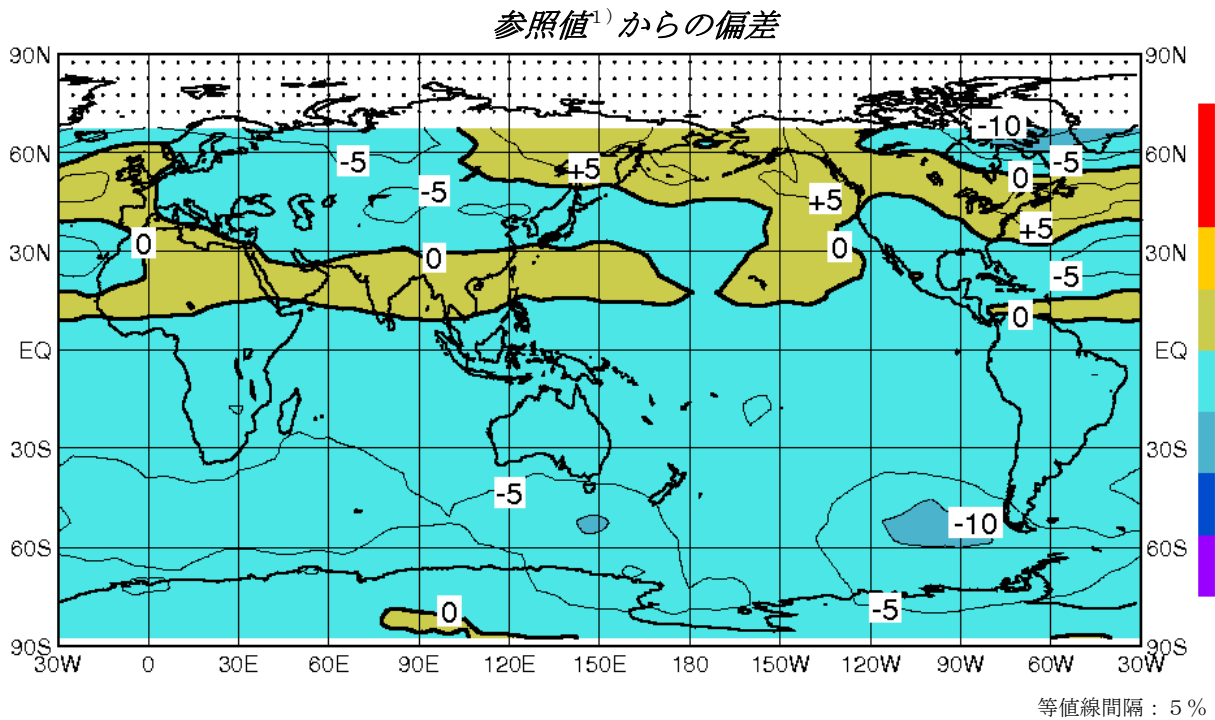
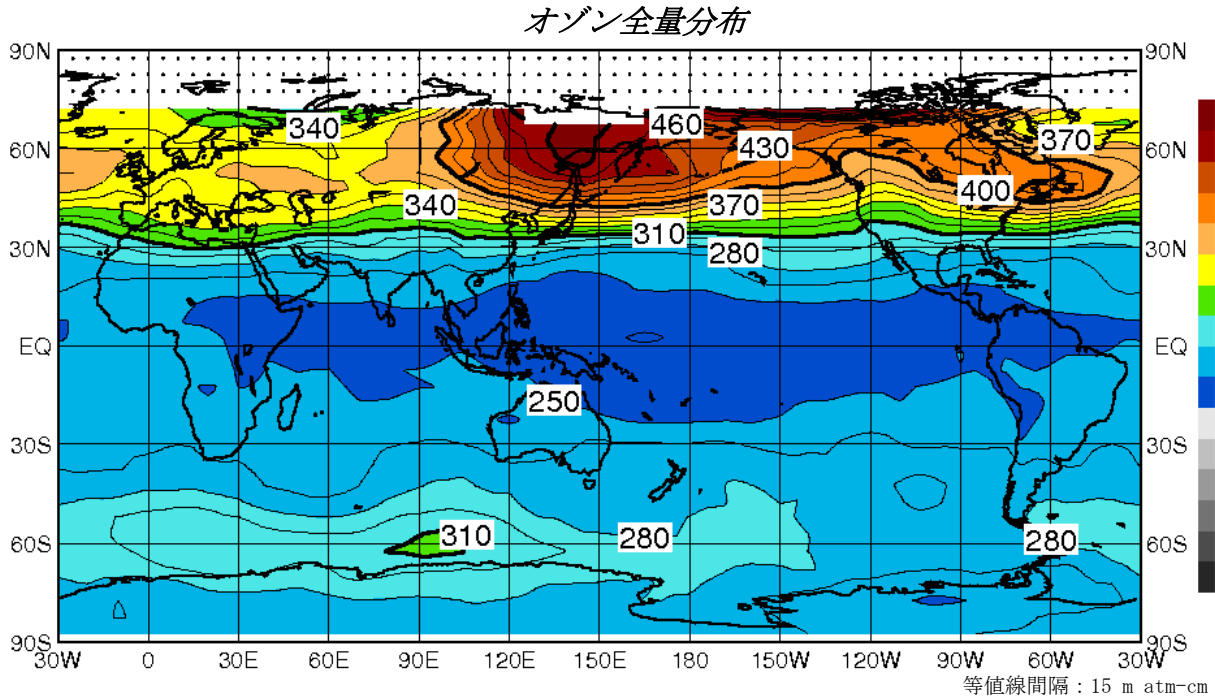
平成 19 年 3 月 20 日 (5/5)

気象庁オゾン層情報センター

## 世界のオゾン全量分布 (2007年2月)

### [概況]

衛星観測資料によると 2007 年 2 月の月平均オゾン全量は、カナダ北東部、グリーンランド、チリの南西の海域およびオーストラリアの南の海域で、10%を超える負偏差領域が見られた。



米国航空宇宙局(NASA)の AURA 衛星に搭載された OMI データ (OMI: オゾン監視装置) を基に作成した。

- 注 1) 参照値: NASA のニンバス 7 衛星に搭載された TOMS データで得られた 1979~1992 年の月別平均値で、平均的なオゾンの状況を示す。  
2) 極域における陰影部は、太陽高度角との関係からデータの取得できない領域を示す。

(本件に関する問い合わせ連絡先: オゾン層情報センター)